

Merry Christmas

和宮龍太郎

Merry Christmas

十二月二十三日。午前。

明日から冬休みだ。高校に入学して、もうすぐ二年が経ち、あと三ヶ月で受験生になるわけだ。
すきま風が八方から自由に入り込む、ぼろい体育館での終業式が終わったあと、後ろで校長の話を適当に聞き流していた、セバスチャンが俺に話しかけてきた。

「ところで、クリスマスの予定は？」

つくづく腹が立つ男である。俺に予定がないことを、きっと知っているのだ。

「まあ、お前は未だにサンタクロースを信じていそうだしな。そんなおこちゃまには、女の一人もよってこないぜ。」

「そういうお前は、サンタクロースをいつまで信じていたんだ？」

「知らねーよ、そんなこと。そんなことより、早くいい女を見つけろよ。高校二年にもなって、未だに女と付き合ったことない奴なんて聞いたこともないぜ。お前は青春を謳歌していない。」

セバスチャンはニヤッと笑ってそう断言した。こいつに言われると、本当に腹が立つ。だいたい彼女を作ってどうなるんだ？自由な時間と金が女のために消えるだけじゃないか？彼女を作ったことのない俺が言うのもなんだが、一体奴らは何が楽しいんだ？

思えば、十一月に入ると町ではクリスマスのための装飾やらで、いつもの日常の光景は明らかに異なるものとなっていた。駅前では、ツリーがかざられ、ライトアップされていた。家全体に電球を巻き付け、夜の間、ずっと点灯させている家庭もあった。いないもしないサンタのために、こんなに豪勢にすることはないだろう？町のそうした雰囲気の影響されたのか、学校では駆け込み需要とも言える現象が起こっていた。うちのクラスだけでも、三組のカップルが誕生したのだ！そんなに一人が嫌なのか？

十二月二十三日。午後。

不思議な現象はもっと前から起こる予定だったのかもしれない。部活帰りにセバスチャンと俺は、学校の近くのコンビニでたむろしていた。セバスチャンの手には、道路いっぱい散乱していた一枚の広告が握られていた。

—メリークリスマス。あなたの欲しいものは何ですか？サンタクロースがお届けします。

By Santa Claus

「何だこれ？」セバスチャンは、怪訝な顔でその広告を見ていた。

「サンタクロースが、俺の欲しいものを届けてくれるっていう意味なのか？もしそうならばかばかしい！全くだれのいたずらだ？」

セバスチャンの言う通りだ、と、この時は思っていた。こんな広告をばらまく奴はそうとう暇

にちがいない、と。

Merry Christmas2

十二月二十三日。夜。

冬休みはたっぷり宿題が出た。先生曰く、来年の受験に向けたものらしい。だが、受験生という意識も芽生えていないので、宿題なんてやる気にもならなかった。それに、新年は気分新たに勉強する、と心に誓っていたから、宿題を片付けるのは、一月に入ってからだ。

部活で疲れたからだを癒すには、テレビが一番だ。ちょうどこの時間帯には、怪傑えみちゃんねるがやっているはずである。

関西人で良かったと思っていると、突然臨時ニュースが飛び込んできた。上沼恵美子と太平サブローの姿は消え、そのかわり、背広をきたニュースキャスターがテレビ画面に現れた。

「臨時ニュースです。今日、全国で、サンタクロースを連想させるビラが大量にばらまかれました。その数、推計一億四千万部です。全国の警察は連携して、一体だれの手によって撒かれたのか、また、その撒かれた経緯を捜査しています。」

「ただいま入りました情報によりますと、クリスマスを祝う全世界でこのビラは撒かれている模様です。ホワイトハウスはテロ組織によるものかもしれないと警戒しています。」

「国連本部前から中継です。事務総長がこの大量のビラまき散らし事件をサンタの陰謀と名付けました。」

「グリーンランド国際サンタクロース協会によると、この件に関していっさい関わっていないとのことです。」

俺は口をあんぐりして、そのニュースを聞き入っていた。

—いったい、どうなっているんだ！

臨時ニュースが終わった後、えみちゃんねるは再開された。だが、臨時ニュースを見る前ほど、えみちゃんねるに興味を持てなかった。

十二月日十四日。午前から夕方。

冬休み一日目にしてクリスマスイブ。朝から部活の練習だ。布団から出るのに時間がかかったため、学校へ向かう足取りは早い。

—それにしても、昨日の臨時ニュースは何だったのだろう？確か、クリスマスを祝う全ての国に撒かれたとか言っていた。いたずらにしては凝りすぎていないか？

そんなことを考えて歩いていると、いつの間にか校門の前に到着していた。よほど考え込んでいたらしい。

俺が所属している部活は、インターハイ出場を何度も経験していて、ソフトテニスをやっている人なら、全国でも知らない人はいない。

練習を始める前に、監督は全員を集めた。

「昨日の奇妙な報道を見た奴はおるか？クリスマスにたいそうなイタズラをする奴もおるもんや。このへんでもビラが散乱していたらしいけど、しょうもないことに気をとられんと練習に

集中するように。いつも言ってることやけど、試合を意識するように。」

—ハイ！

各コートに散らばり、練習が始まった。

乱打に始まり、ボレー、ストローク、サーブ・レシーブ、アタック止め、形式練習をして部活は終了した。

「今日はいつもより声は出てたわ。やけど、さらに上を目指そうと思ったら、もっと腹から声だせや！それと、いつも注意されてることをまだできてない奴がおる！何回言うたらわかるんや。明日以降まだ繰り返すようやったら、出て行ってもらうぞ！今日は解散や。」

「整列！礼！」

—ありがとうございました！

Merry Christmas3

十二月二十四日。夜。

もうくたくただ。風呂に入って、頭を乾かし、こたつに入った。心地よい暖かき、そして睡魔が襲う。まぶたが重くなってきた。台所からシチューがコトコト煮詰まる音を聞いたのを境に、俺の意識は完全に消えた。

十二月二十四日。夜中。

シャリン♪シャリン♪

鈴が鳴る音が聞こえた。はじめは心地よかったこたつも、今は熱くなりすぎている。

時計を見ると、二十四時前。少し寝すぎたな。家の中は薄暗くなっていた。みんな寝てしまったらしい。テーブルの上には、母が作ってくれたシチューが置いてあった。その横に端正な字でメモが残されていた。

『気持ち良さそうに寝ていたので、起こさないでおきました。テーブルの上のシチューをチンして食べて下さい。五分くらいで暖かくなると思います。』

ーチン。

ご飯とシチューが今日の晩ご飯だ。シチューはおいしそうな湯気を立てていた。育ち盛りのからだには少ない気もするものの、明日の練習を考えると、そう食べ過ぎることはできない。

ゴンゴン。

窓をたたく音。

誰だ。

ゴンゴン。

二回目。誰かが外にいることは間違いない。

俺が住んでいるのは十二階の端っこの部屋だ。泥棒はそんなところまで昇ってこない。それなら、火事か？隣の家から小火が出て、助けを求めているのかもしれない。警報は鳴っていないが、そう考えるのが合理的だ。

窓に近づくにつれ、俺の心臓が高鳴りを始めた。耳の奥でドンドンと鳴っている。一体誰だ？そして、カーテンを開けた。

初老の人が立っていた。白いひげに、真っ赤な衣装、そして太っている。後ろには大きなそりとトナカイ。一まぎれもなくサンタだ！

俺は何の疑いもなくそう確信し、窓を開けた。

「やあ。こんばんは。遅くなってすまんのお。もうみんな寝てしまったのではないのかと心配

してしまったが、よかった、よかった。」

まぎれもないサンタは安堵の溜息をもらしそう言うと、俺に、箱を渡した。

「これは、君の分で、こっちが妹さんとお姉さんの分じゃ。それでは、メリークリスマス。」

「あの・・・ありがとうございます。」

まぎれもないサンタはニコッと笑い、そりにまたがった。トナカイは見えない道を走り出した。徐々に姿が遠くなる。俺の心臓はまだ、胸を力強く打ち続けていた。しばらく、ベランダで呆然としていた。

テーブルに座る頃には、シチューはすっかり冷めてしまっていた。